

校番	202 127	学校名	広島叡智学園中学校・高等学校	校長氏名	福嶋 一彦	全日制課程	本校
----	------------	-----	----------------	------	-------	-------	----

1 教育目標

「学びの変革」の目指すべきモデルとなる学校として、学びを通じて平和な社会づくりを実現し続ける存在となることのできる人材を育成します。

2 育てたい(幼児・児童)生徒像

社会の持続的な平和と発展に向け、世界中のどこにおいても地域や世界の「よりよい未来」を創造できるリーダーとなる生徒

3 中期(3年間)経営目標 ※教育活動その他の学校運営に関する目標

- (1) 国際バカロレア教育を、教育活動の主たるツールとして充実させ、本校の教育目標の達成を目指す
- (2) 教科横断的で探究的な学習活動を展開することにより、主体的・対話的で深い学びを実現する
- (3) 寮生活における多種多様な人とのコミュニケーション活動等を通して、将来のリーダーとしての人格の陶冶に努める

4 短期(本年度)経営目標及び行動計画等 ※中期経営目標を達成するための本年度の経営目標及び行動計画等

中期(3年間)経営目標				
(1) 国際バカロレア教育(IBプログラム)を、教育活動の主たるツールとして充実を図り、本校のミッション、ビジョンの達成を目指す				
短期(本年度)経営目標	本年度行動計画	評価指標	現状値(前年度)	目標値
IBプログラムを導入した本校のアイデンティティが具現化した姿を、生徒、保護者、教職員それぞれが、交流等を通して目指す学校の姿を自らの言葉で表現するとともに、自らが関与した行動や活動について、その目的や内容を説明することができる。	・教職員研修を実施し、本校のアイデンティティが具現化した姿を共有する。 ・保護者に対し、コーディネーターニュース等を用いた情報発信を行い、本校の目指す姿と教育活動の関係性を示す。 ・生徒が、活動の目的と本校の目指す姿の関係性を振り返る活動を意識的に取り入れる。	ループリックを用いた自己評価(生徒・保護者・教職員対象 4段階)	2.9	3.0
日本の学習指導要領とIBプログラムを融合させた指導と学習の充実を図るために、PLチームの示す方向性を基に、IB推進チームと教科会の間でミドルアップダウンを行うなどして、研究推進の校内組織の活性化が図られている。	・PLミーティングの定期的な実施とIB推進チームの効果的な接続を行う。 ・MYPチーム会議、DPチーム会議の定期的な実施と各教科会への効果的な接続を行う。 ・各教科会を定期的かつ効果的に実施する。	教職員対象アンケート	-	
校外の様々な人的・物的資源を活用したプログラムの実施により、IBプログラムの充実が図られている。	・島内企業におけるインターンシップの実施 ・島のニーズを捉えたSAの実施 ・各教科における校外の資源を活用したカリキュラムの充実、改善(他校連携を含む)	ループリックを用いた評価(校外関係者からのフィードバックを対象 4段階)	-	2.8

中期(3年間)経営目標				
(2) 教科横断的で探究的な学習活動を展開することにより、主体的・対話的で深い学びを実現する。				
短期(本年度)経営目標	本年度行動計画	評価指標	現状値(前年度)	目標値
授業での学習活動に、見通しを持って粘り強く取り組み、その学習をまとめ、振り返って次につなげたり、仲間や地域の方々との対話や協働を通じて考えを広げたり深めたりすることができる。	・重点的に育成する5つの資質・能力とATLの関係性を整理することで、各学年で目指す姿を、生徒および教職員で共有する。 ・授業などの教育活動において整理したATLスキルが発揮され、伸長できる指導と学習を実践する。	ループリックを用いた自己評価(生徒・教職員対象 4段階)	-	平均値 3.0
生徒が実社会の正解が存在しない問いに向き合い、その課題解決に向けて収集・精査した情報を基に、授業で身に付けた知識・技能を活用して、自らの考えを形成し他者に表現できる、3年間を見通したプログラムを開発し、それを実践・検証する。	・ループリックを用いて、各教科の教科横断的な資質・能力を高める指導計画の充実を図る。 ・未来創造科において、実社会の複雑な文脈の中で、自ら設定した課題を解決する過程において、各教科で身につけた見方・考え方を働かせることができるプログラムを開発する。	ループリックを用いた自己評価(教員対象 4段階)	-	平均値 3.0
教員一人一人が「教科横断的で探究的な授業づくり」を行うために必要な研修プログラムの開発を推進するとともに効果的な指導方法や教材開発の共有化を図る。	・年間3回の授業交流月間を軸とした教員研修の充実を図ることで、それぞれの教員が、自らを高めるための研究・研修に積極的に取り組み、自己変革できる教員集団を目指す。 ・各教科での教育実践を教員研修等の場で共有することで、教科を越えた指導方法の確立と教科横断型の単元づくりの機会を創出する。	ループリックを用いた自己評価(教員対象 4段階)	-	平均値 3.0

中期（3年間）経営目標				
(3) 寮生活における多種多様な人とのコミュニケーション活動等を通して、将来のリーダーとしての人格の陶冶に努める				
短期（本年度）経営目標	本年度行動計画	評価指標	現状値 (前年度)	目標値
集団への所属感や連帯感を深め、集団の構成者であることを自覚し、人と人との触れ合いやつながりを深めていくことができるようにする。	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒会活動と寮での係活動とを関連付け、一人一人がリーダーとフォロワーの両面を経験し、様々な役割に対して、責任感を持って取り組み、集団生活の安定に向けて貢献できるようにする。 ・自発的に集団生活におけるルールやマナーを守り、個の役割を責任持って実践できる寮の組織づくりを行う。 	生徒アンケート調査における肯定的回答の割合	-	85%
生徒一人一人が、寮生活におけるきまりを厳守し、主体的に規律ある生活を通して、安心して充実した寮生活を送れていると感じることができるようにする。	<ul style="list-style-type: none"> ・寮則の意味や目的を考えさせ、何のために守らなければならないのかを理解し実践できるような機会を創出し、評価場面を設定する。 ・異年齢集団での交流や寮スタッフとのコミュニケーションの充実を図るための機会を通して、協働することや、他者の役に立ったり貢献したりすることの喜びを得られる活動を充実させる。 	生徒アンケート調査における肯定的回答の割合	-	82%
生徒一人一人が、自己の健全な生活を実現するために、食に関する意識を高め、望ましい食習慣を身に付けている。	<ul style="list-style-type: none"> ・日々の食事指導及び職に関する指導を行い、食事のマナーや望ましい栄養などの食生活に関する正しい知識を習得させる。 ・地場産物を活用した郷土料理の提供を通して、食事に興味・関心をもたせる。 	生徒アンケート調査における肯定的回答の割合	-	82%

働き方改革に関する短期（本年度）目標

短期（本年度）目標	本年度行動計画	評価指標	現状値 (前年度)	目標値
教員が、子供と向き合う時間が確保されていると感じることができている。	子供と向き合う時間の定義について、全体研修等で理解を深め、この時間の確保のために必要な方策を検討し、実践する。	業務改善アンケート項目における肯定的回答の割合	91.2%	95%
教職員全員が勤務時間に対して高い意識を持ち、時間外における勤務を縮減している。	本校において設定した入退校時刻を意識した業務遂行ができるよう各分掌や学年で検討し、好事例を全体で共有する。	一月当たりの時間外勤務時間が45時間以下の教職員の割合	88%	100%
教職員に対して、全体・学年・分掌において、形態を工夫しながら、働き方改革に関する研修を実施している。	働き方改革取組方針等について、全体研修等で十分理解を深めるとともに、自らの取組状況を振り返り、課題や対策を見出す機会を設定する。	学年・分掌における研修の実施合計回数	-	2回

①	<p>国際バカロレア教育を、教育活動の主たるツールとして充実を図り、本校の教育目標の達成を目指す</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒のルーブリックにおける自己評価は、前回と比較し大きく上昇し、75%の生徒が学習やSAと本校のミッション等の関係性を表現することができた。保護者に対しては、本校の教育活動に対する理解を深めることができるよう、コーディネーターニュースやビデオ配信など、タイムリーに取組を行うことができた。また、英語力の伸長に関しては、下半期は、外部検定試験や校内での取組をもとにクラス替えや個別の支援を行うなど、個に応じた適切な指導を行った。その結果、年度当初から1段階以上フェーズが上がった生徒の割合が75.6%であり、目標値を達成することができた。 一方で、「学校のアイデンティティを明確にし、生徒・保護者・教職員が自らの表現で、自身の行動・活動の目的を説明することができる。」という達成目標の達成状況について、年間の取組に対するルーブリックを用いた自己評価（4段階）を実施し、数値としては目標を達成しているものの、4段階目の「学校のアイデンティティをミッション等と関連を明確にし、自らの表現で、自身の行った行動の目的や、これから行う行動・活動の目的を説明することができる」割合は十分ではない。また、英語力の伸長に関しては、年度当初から1段階以上フェーズが上がった生徒の割合が75.6%であり、目標値を達成することができた。一方で、少数ながら苦手意識を持つ生徒もあり、達成状況に徐々に差ができていく。
②	<p>教科横断的で探究的な学習活動を展開することにより、主体的・対話的で深い学びを実現する</p> <ul style="list-style-type: none"> 教科を越えた指導方法の確立と教科横断型の単元づくりのヒントを得ることができるよう、IB推進チームが、年間3回の授業交流月間を軸とした教員研修を実施し、各教科での教育実践を教員研修等の場で共有する機会を創出している。また、総合的な学習の時間（未来創造科）の主任と各教科主任が、教科主任会議等の場面で、実社会の複雑な文脈の中で、自ら設定した課題を解決する過程において、各教科で身につけた見方・考え方を働かすことができるような工夫について意見交換している。 一方で、本校で重点的に育成する5つの資質・能力とIBプログラムにおけるATLの関係性を整理し、各学年で目指す姿を、生徒および教職員で共有したり、ルーブリックを用いて、各教科の教科横断的な資質・能力をさらに高める指導計画を作成したりすることは十分にできていない。
③	<p>寮生活における多種多様な人とのコミュニケーション活動等を通して、将来のリーダーとしての人格の陶冶に努める</p> <ul style="list-style-type: none"> ユニットリーダーや生徒会委員長を中心に、より良い学校づくり、寮生活の実現に向けて自治的な活動を進め、個に対する丁寧な声かけと必要に応じた面談等を継続して進めることができた。また、居室の整理整頓や洗濯等、個別の支援を充実させるとともに、生活実態を家庭と情報を共有する取組を進めることができた。寮生活に関するアンケート調査項目「あなたは、生活の決まりを守り、規律ある生活を送っていますか」において肯定的な回答が94.9%と高い数値になった。 一方で、寮生活に関するアンケート調査項目「あなたは、生活の決まりを守り、規律ある生活を送っていますか」において、肯定的な回答のうち「できている」と回答した生徒は、35.9%であり、「どちらかというのできている」と回答した生徒は、59.0%であったことから、十分な取組とはなっていない。さらに、「どちらかというのできていない」「できていない」と回答した生徒もいた。 ハウスマスターやハウスサポーターと教職員との連携や指導方針の共有を図り、集団への働きかけと同時に、個への丁寧な支援等が一層必要である。そのため、寮則の目的を一人一人の生徒が理解し、実践できる力を育成していくことを今後も継続していく必要がある。
<p>働き方改革 各教職員が限られた時間の中で業務の効率化とタイムマネジメントに努め、「学校における働き方改革取組方針」の徹底を図る</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> 県教育委員会が実施した「令和2年度県立学校における働き方改革・業務改善に係るアンケート」では、91.2%の教員が、「子供と向き合う時間が確保されていると感じることができている」と回答しており、目標を上回るものであった。 一方で、「子供と向き合う時間」において、生徒の成果物等を評価する業務が多くを占めており、生徒と顔を合わせて質問に応じるなどの時間が十分確保できていないことが分かった。